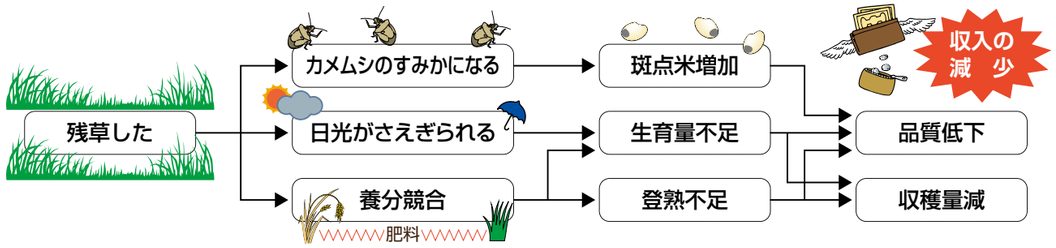
～ 雑草防除を徹底しましょう ～

今年度ＪＡ秋田おばこ管内での一等米比率は12月８日現在で98.1％となっており昨年に引き続き高品質な米が生産されています。２等以下の主な落等原因は、斑点米カメムシ類による着色粒が多くをしめています。

特に本田内に雑草が残ってしまったほ場では雑草が斑点米カメムシ類のすみかとなってしまい加害されている例が多くみられました。また、雑草が多く残っているほ場では養分が競合してしまい収量もほかに比べて少なくなっていました。

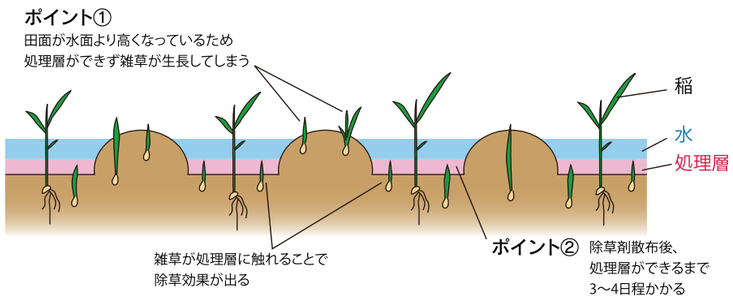
結果として収量、品質ともに低下し収入の減少につながってしまいます。いま一度、来年に向けて雑草対策をおさらいしましょう。



■ まずは、効かせる環境づくりから

雑草の防除は除草剤散布を基本としますが、まず除草剤の効果が最大限発揮されるほ場を作りましょう。除草剤は散布後水により拡散し、その後３～４日かけて田面に処理層を作り除草効果を発揮します。この間に田面が露出してしまうと処理層が作られず除草効果が発揮されません。耕起、代かき作業は丁寧に行い田面の凸凹を無くしましょう

ほ場の水持ちを良くすることも重要です。代かきを荒かき、植代かきの２回かきをするなど丁寧に行い漏水しにくいほ場を作りましょう。また、畦畔のネズミ穴などから漏水する場合も多くあります。畦塗り機や畦マルチなどでしっかりと畦畔からの漏水を防ぎましょう。除草剤散布時にたっぷりと水を張っておくことも重要です。

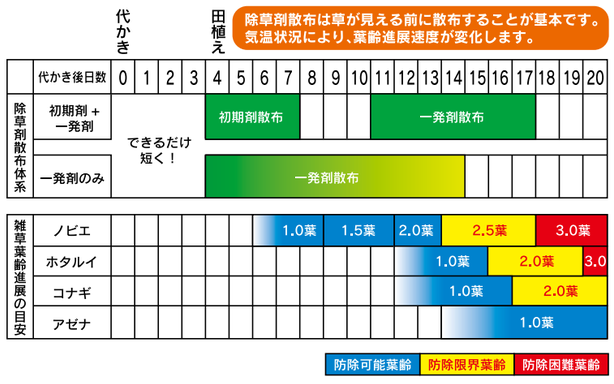


■ 除草剤はほ場にあった剤を選びましょう

除草剤は剤によって得意とする雑草の種類が違います。自分のほ場にはどのような雑草が多いのかよく見て効果的な除草剤を選択し雑草を防除しましょう。前年、雑草に占有されたほ場では一発剤だけでは防除しきれませんので、初期剤や後期剤をうまく組み合わせて使用しましょう。

近年は雑草の生育スピードが早まっています。除草剤の散布は代かきと田植えの間を短くし、代かきから10日以内を目安に一発剤の散布を行いましょう。

除草剤散布適期例と雑草葉齢進展の目安

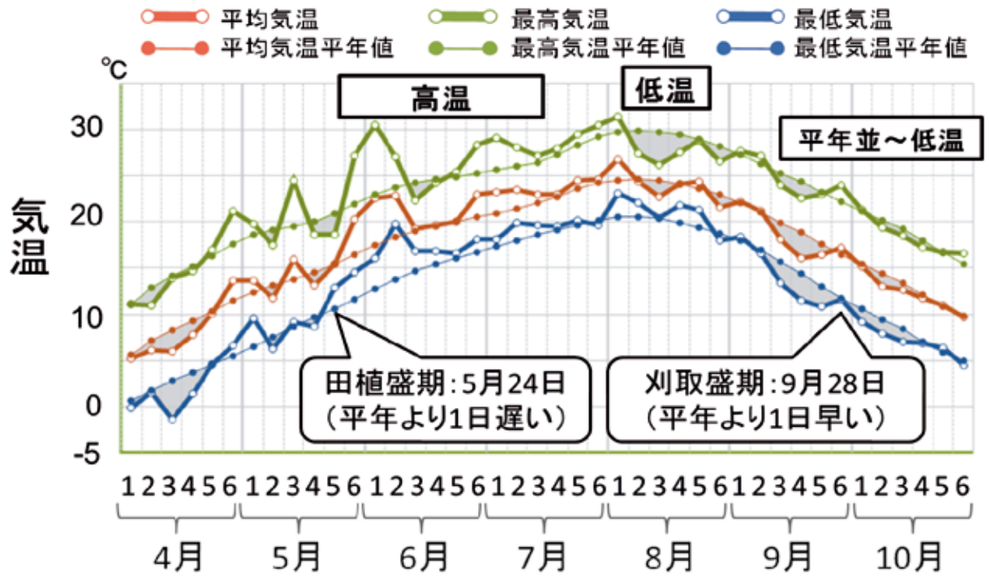


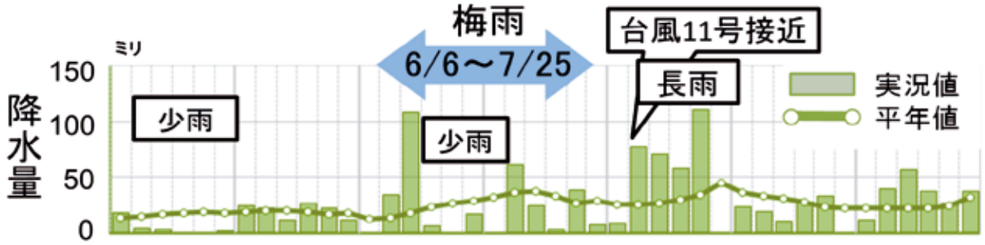
No.7
農業技術情報
安心のネットワーク NOSAI仙北
平成26年12月発行
監修：仙北地域振興局農林部農業振興普及課
JA秋田おばこ

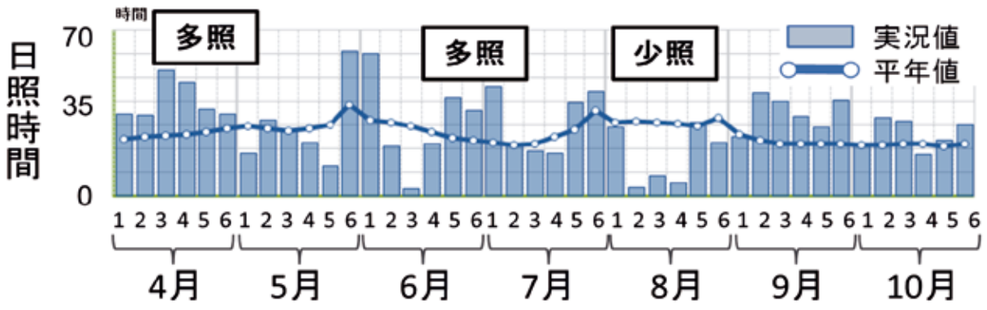
平成26年 稲作を振りかえって

【気象経過～アメダスポイント大曲～】

今年の気象経過を振り返ると４月下旬から気温が平均より高い日が続き降水量も少雨傾向となりました。一転して８月からは曇天となり平均より気温が低く、降水量も多めとなりました。







※今年の生育概況＆作柄概況を次ページに掲載しておりますので、ご覧下さい。

■ 生育概況

仙北地域振興局農業振興普及課　水稲定点調査結果より

【育苗期～雪消え早く、作業は順調～】

育苗期間は気温が高めに推移したことから、苗焼け、徒長等が散見されました。また、育苗ハウス内でのもみ枯細菌病やムレ苗による苗の交換も見られました。ハウス内ではフタオビコヤガの発生が目立ちました。本年は昨年、一昨年に比べ融雪が早く、好天が続いた影響でほ場の乾きが良かったため、耕起作業は平年より早い進捗となりました。（耕起盛期：５月３日（平年より３日早い））

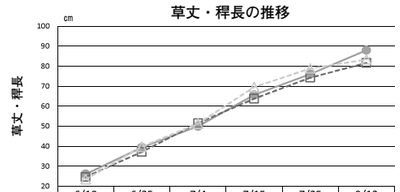
【田植期以降～活着、生育は良好～】

田植期にあたる５月中旬ころからは高温・多照の日が続き、活着は概ね良好でした。６月10日の定点調査では平年に比べ生育が進んでおり、特に茎数は平年比134％となりました。有効茎決定期である６月25日前にほとんどの定点ほ場で目標茎数が確保され、中干しの適期が早まりました。

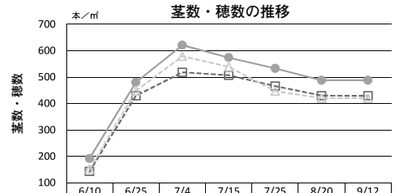
茎数が多いことで、生育過剰傾向となっているほ場が多く見られました。葉色はほ場間差が大きく、追肥の有無・量などの判断が難しい状況でした。

【出穂～刈取り～日照不足による登熟不良～】

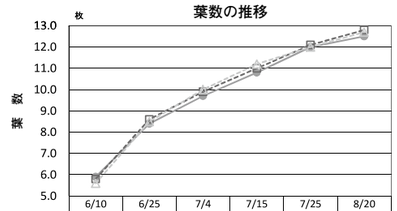
出穂期直後の８月11日頃、台風11号による高温の強風で、出穂したばかりの穂が白穂となったり、褐変するなどの被害が一部で発生しましたが、管内では、大きな減収につながる程の被害ではありませんでした。また、この期間の日照不足により登熟が遅れ、刈り取り時期の判断が難しく、早期刈り取りにより青未熟粒が多く発生したほ場も見られました。８月上旬～下旬の長雨以降、倒伏が見え始め、９月に入ってからは降雨のたびに倒伏面積が拡大しました。刈取始期、盛期は平年並みの９月21日、９月28日、終期は平年より２日遅い10月10日となりました。これは、前半に刈り取ったほ場で青未熟粒が多かったため、予定を変更し刈取りを遅らせたためと考えられます。



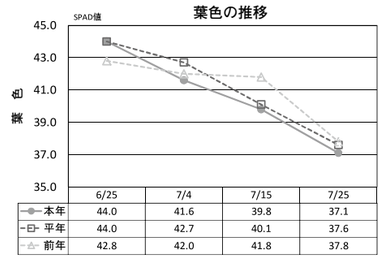
	6/10	6/25	7/4	7/15	7/25	9/12
本年	26.1	39.4	50.0	65.7	76.1	88.0
平年	24.7	37.2	51.6	63.8	74.3	81.7
前年	23.5	39.8	51.3	69.6	78.9	83.4



	6/10	6/25	7/4	7/15	7/25	8/20	9/12
本年	192	480	621	574	533	488	488
平年	143	429	518	507	466	430	429
前年	152	448	579	539	447	420	420



	6/10	6/25	7/4	7/15	7/25	8/20
本年	5.9	8.4	9.7	10.8	12.0	12.5
平年	5.8	8.6	9.9	11.0	12.1	12.8
前年	5.6	8.5	10.0	11.2	12.0	12.7



	6/25	7/4	7/15	7/25
本年	44.0	41.6	39.8	37.1
平年	44.0	42.7	40.1	37.6
前年	42.8	42.0	41.8	37.8

■ 作柄概況

～県南地域の作況指数は「103」、収量600kg／10ａ～

平成26年10月30日に東北農政局秋田地域センターが公表した資料によると、秋田県の収量は596kg／10ａで作況指数104、県南地域の収量は600kg／10ａで作況指数103となりました。

～総籾数は平年より多いが、登熟歩合は平年より低い（定点調査ほ）～

水稲定点調査ほ（あきたこまち、管内10地点）の玄米収量は591kg／10ａ（篩目1.9㎜）で平年よりやや多い（平年比102％）結果となっています。

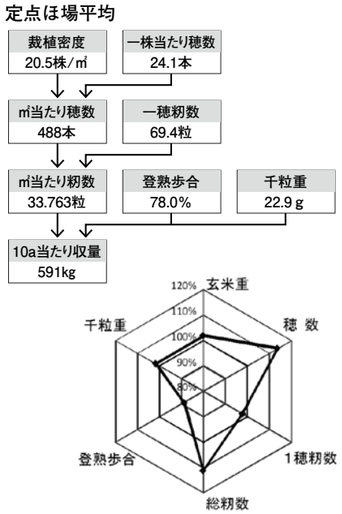
一穂粒数はやや少ないものの、㎡当たり穂数は多く、総籾数は多くなりました。登熟歩合は低いものの、結果的に玄米収量はやや多くなっています。

また、ＪＡ秋田おばこの12月８日現在の１等米比率は98.1％と非常に高くなっています。

定点収量及び収量構成要素

	玄米重 kg／10ａ	穂数 本／㎡	１穂籾数 粒／穂	総籾数 粒／㎡	登熟歩合 %	千粒重 g／千粒
本年	591	488	69.4	33,763	78.0	22.9
平年比（％±）	102%	114%	98%	111%	−9.9	102%
前年比（％±）	100%	116%	96%	112%	−13.9	102%

定点ほ場平均



■ 26年産米の課題を分析します。

～耕種的な対策で“天候に負けない稲づくり”を実践しましょう!!～

ー次年度対策①ー ～病害虫の発生状況と来年度の対策～

⑴　いもち病（発生量　葉いもち：少　穂いもち：やや多）

葉いもちの発生は少なかったものの、出穂期以降の長雨等により適期防除ができず、穂いもち（枝梗・穂首いもち）の発生が散見されました。葉いもちの発生が全く認められないほ場では穂いもち防除の必要はありません。但し、常発地帯や隣接ほ場で多発している場合は出穂期から７日後までにラブサイド剤の茎葉散布を行いましょう。

⑵　斑点米カメムシ類（発生量：平年並）

本年は全県的に斑点米カメムシ類の発生が多く、警報が発表されました（８月７日）。管内でも、ほ場内にノビエ等が残ったほ場では斑点米カメムシ類の被害による落等が見られました。斑点米カメムシ防除のための雑草対策については次ページに掲載しております。

⑶　紋枯病（発生量：やや多）

７月４半旬の発病調査により発生は平年に比べ多く確認され、７月28日に注意報「紋枯病の発生が県内全域で多い」が発表されました。出穂期後、長雨が続き、倒伏したほ場を中心に被害が見られました。今年度多発したほ場では、来年度も多発する恐れがありますので次年度は防除を徹底しましょう。

ー次年度対策②ー ～登熟歩合低下を防ぐ～

⑴　中干しの適期実施

今年度は分げつが旺盛で、弱勢茎が多かったことから、有効茎歩合は78.6％と平年（82.3％）に比べかなり低くなりました。近年、７月に入ってから中干しを始め、幼穂形成期まで行っているほ場が見られますが幼穂形成期の中干しは食味低下の要因となります。㎡あたりの目標茎数である415本を確保したら、直ちに中干しまたは深水管理により弱勢茎を抑制しましょう。

⑵　幼穂形成期の追肥

栄養診断により、追肥の時期と量を判断し、適切な籾数を確保しましょう。

○あきたこまちの生育・栄養診断について

栄養診断とは、草丈、茎数、葉色を測定し、理想生育と比較して生育を判断するものです。

①　生育指数（草丈×㎡茎数）と葉緑素計値を用いて、右図を参考に稲の生育が理想の範囲内にあるか否かの判断を行います。

②　生育診断の結果に基づき、右下表により穂肥の時期・量を判断します。

注）減数分裂期（７／25頃）以降の追肥は食味低下の要因となりますので避けましょう。

⑶　日照時間も考慮した刈取り時期の判断を

本年、青未熟米が多発した要因の一つに、８月上～下旬の低温・日照不足が考えられます。本年のように出穂後の日照が少ない場合は、積算気温のみでなく、積算日照時間も考慮に入れて刈り取り適期を判断します。

①　積算日照時間による刈り取り適期、出穂後の積算日照時間が200時間に到達した日からとなります（目標収量570kg／10ａの場合）。

②　ほ場により生育は異なるため、刈取り時期の最終的な決定は、気温と日照時間のバランスと、籾の黄化程度（黄色～黄白の割合が90％となる頃）を確認しながら判断します。

図　幼穂形成期における栄養診断（県南）

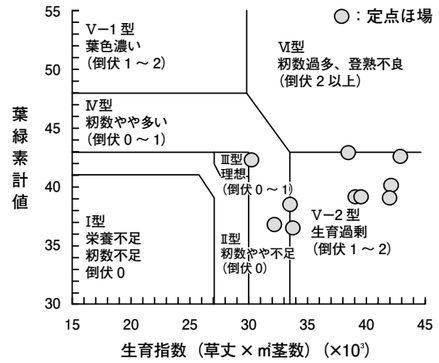


表　栄養診断に基づく穂肥の目安

生育型	穂肥の判定（Ｎ成分kg／10ａ）	
	幼穂形成期	減数分裂期
Ⅰ型	２kg	２kg
Ⅱ型	２kg	２kg
Ⅲ型	ムラ直し１kg	２kg
Ⅳ型	無し	２kg
Ⅴ－１型	無し	ムラ直し１kg
Ⅴ－２型	無し	ムラ直し１kg
Ⅵ型	無し	無し

（注）目標収量570kg／10ａ、あきたこまち

表　各アメダス地点における出穂盛期（８月２日）の積算気温および積算日照時間による刈り取り適期予想日

アメダス地点	積算気温 950℃到達日		積算日照時間 200時間到達日
	本年値 出穂盛期８月２日	（参考） 平年値 出穂盛期８月４日	本年値 出穂盛期８月２日 （精算気温による予想との比較）
大　曲	９月13日	９月15日	９月16日（３日遅い）
角　館	９月14日	９月15日	９月19日（５日遅い）
田沢湖	９月16日	９月17日	９月21日（５日遅い）